

自分の物語として「泣いた赤おに」を読む

今泉 岳雄

「泣いた赤おに」は、浜田広介の死後40年を過ぎた今でも多くの読者に親しまれている。また、道徳資料としても教育現場で人気があり、国語の教科書にも用いられている。

このように読み継がれる理由として、「青鬼の自己を犠牲にした献身的な友情」が読者の心に訴えることがまず挙げられる。筆者は以下の3点をその理由に付け加えたい。第一に赤鬼が人間と鬼との間において、人との関係性に葛藤するマージナル・マン（周辺人・境界人）として描かれている点である。このことは、読者に友だちや家族に受け入れられない悲しみや、現代的な問題でもあるいじめや差別への痛みを呼び起こすのではなかろうか。

他の2つの理由は、突然の赤鬼と青鬼の別離が以下の2つのことを読者に喚起させるためである。

一つは、唐突とも言える青鬼と赤鬼の別れというこの物語の結末が、読者の心の均衡をくずして内的に抱えているものを刺激し、多様なその後の物語を連想させ、自分の物語として展開していくことである。

他の一つは、赤鬼と青鬼との突然の別れに、広介自身の大事な母・弟・故郷との別離体験が色濃く投影されており、それが物語に命を与え、子どもを中心とした読者に、母親や大切な存在が予告なくいなくなる不安や切なさを喚起させるのではないかと考える。

これらの理由を考えると、「泣いた赤おに」は比較的単純な物語構成でありながら、読者の実存に深く迫る要因を持つために、自分の物語として長く読み継がれていると考えられる。読者の実存に深く迫る要因については、マージナル・マンとアイデンティティ、トリックスター、道徳教材を自分の物語として読む視点、結末からのその後の物語の連想、広介の生い立ちの作品への投影という視点からさらに論じた。

1. はじめに

「泣いた赤おに」は、樋口（2014）によると、浜田広介40歳の1933（昭和8）年に「おにのさうだん」の題で『カシコイ二年小学生』八月号（精文館）に掲載されたのが初めてである。翌年「鬼の涙」、翌々年の1935（昭和10）年には「泣いた赤おに」と改題され今日に至っている。話の大筋は残されつつ、広介が80歳の生涯を閉じるまでに、何度となく細部が改変されながら雑誌や本に発表され続けた。

そして、広介死後40年を過ぎた今も絵本や童話集の形で発刊され続けている。例えば2000年以降に出版された絵本では、野村たかあき絵（2013）『ないたあかおに』講談社、長崎尚志プロデュース・浦澤直樹絵（2011）『泣いた赤鬼』小学館、nakaban絵（2005）『ないた赤おに』集英社、いもとようこ絵（2005）『ないた赤おに』金の星社、などがあげられる。同じく2000年以降に出た童話集としては、『泣いた赤おに、浜田ひろすけ童話集』（2011）角川書店、鬼塚りつこ編集（2006）『心に残るロングセラー名作10話 浜田広介童話集』世界文化社、『泣いた赤おに一浜田廣介童話集』（2005）偕成社、『泣いた赤おに』（2005）ポプラ社、『泣いた赤おに』（2004）小学館、などがあげられよう。また、2011年には、「泣いた赤おに」の物語を下敷きにした山崎貴と八木竜一合同監督による3DフルCGの『friendsもののけ島のナキ』が映画化されている。さらに2015年11月には、NHK山形放送局制作の『私の青おに』が放映されている。

道徳の授業の資料としても「泣いた赤おに」は1962（昭和37）年に文部省の『小学校道徳資料4 小学校道徳読み物利用指導I（低学年）』で取り上げられて以来、1965年から1985年に道徳の授業の教材に盛んに用いられ、現在でも、学校図書、光文書院、文溪堂、光村図書の副読本に入っている。明治図書から発刊されている教師向けの教育雑誌である『道徳教育』でも「泣いた赤おに」は以前から何回も取り上げられている。最近では2013年5月号、6月号、2014年1月号、9月号に掲載されており、教師から求められる道徳教育の資料であることがわかる。さらに教科書としては、広介の6作品（7タイトル）が戦後から平成に入るまでに「泣いた赤おに」を除いて掲載されている。「泣いた赤おに」については、昭和の時代は、日本書籍、東京書籍、光村図書の小学校二年生または三年生の国語教科書に採用されたが、本文全文は掲載されておらず、読書へ導くための間接的な教材の取り上げ方であった。しかし、2011（平成23）年に教育出版の小学校二年生に全文が掲載された。

このように、作品誕生以来今日まで一般読者にも教育界においても読み継がれる理由として、「青鬼の自己を犠牲にした献身的な友情」が読者の心に訴えることが挙げられている（文部省小学校道徳の指導資料 第2集 1965）。筆者は、それに以下の3つを加えたい。

第一に、赤鬼が人間と鬼との間にいて、人との関係性に葛藤するマージナル・マン（周辺人・境界人）として描かれている点である。自分の物語として「泣いた赤おに」を読むときに、現代日本の疎外や差別の問題と重なり、読者を惹きつける要因になっているように思われる。このことについては、2節（1）（2）において、マージナル・マンとアイデンティティの視点から、昔話「鬼の小綱」の片子の例を引きながら考察した。また、赤鬼の友人でありながら対極にいた青鬼の存在の意味についても、双方向的な関係やトリックスターの観点から2節（3）で論じた。

また、長く読み継がれてきた他の2つの理由とは、青鬼と赤鬼の突然の別れが以下の2つのことを読者に喚起させるためである。

一つは、青鬼と赤鬼の突然の別れというこの物語の結末が、読者の心の均衡をくずして内的に抱えているものを刺激し、多様なその後の物語を連想させ、自分の物語として展開していくことである。例えば、青鬼と赤鬼が再会して新たな深い友情につながっていく物語もあろう。青鬼と赤鬼の嘘がばれて、赤鬼が村から排斥され、嘘をつくとその報いが生じるという教訓話になるかもしれない。読者の連想する物語の内容

に、読者自身の願望・価値観・葛藤などが表現されることを自覚し、自分の物語として読んでいくことが、自己の成長を促すということについて、3節の道徳教材での扱われ方や、4節の自分の物語を創るという点から論じた。

他の一つの理由は、赤鬼と青鬼との突然の別れという物語は、広介自身の心の傷となるような別離体験が色濃く投影されており、それが物語に命を与え、子どもを中心とした読者に、母親や大切な存在が予告なくいなくなる不安や切なさを喚起させるのではないかと考える。第5節で見るように、広介は米沢中学校時代に両親の離婚による母との別れを体験した。また、郷里を青年期に去った体験や弟との死別など、広介の言うところの「急には断ち切りがたいきづな」（浜田, 1998）である大切な人や場との別離体験をしており、「むく鳥のゆめ」や「よぶこどり」など母子の別れを直接扱ったものもある。5節では、広介の生い立ちが、どのように「泣いた赤おに」に投影されているかを論じた。

以上から、「泣いた赤おに」は比較的単純な物語構成でありながら、読者の実存に深く迫るために、長く読み継がれてきたと考えることができる。2節より実存に深く迫る理由を上記にあげた視点から考察したい。

2. マージナル・マンとしての赤鬼とアイデンティティ

(1) マージナル・マンとしての赤鬼

赤鬼は人間社会と鬼社会の間に住んでおり、村人と仲良く暮らしたいと願いながら排除されていた経緯からマージナル・マンの概念に相当する特性を持っていると言えないだろうか。今野（2015）は「部落問題・人権事典」の中で、マージナル・マン（marginal man）について以下のように解説している。

異質な諸社会集団のマージン（境域・限界）に立ち、既成のいかなる社会集団にも十分に帰属していない人間。境界人、限界人、周辺人などと訳される。マージナル・マンの性格構造や精神構造、その置かれている状況や位置や文化を総称して、マージナリティと呼ぶ。マージナル・マンの概念は、1920年代の終わり頃に、アメリカの社会学者パークが、ジンメルの〈異邦人〉の概念（潜在的な放浪者、自分の土地を持たぬ者）の示唆を受けて構築した。パークは〈人種的雑種〉（たとえば、白人と黒人の混血児＝ムラト、スペイン人と先住民族の混血児＝メスティーゾ、東洋人と西欧人の混血児＝ユーラシアンなど）に典型的にみられるパーソナリティ類型（自我の分裂、行動の不安定、強い自己意識、激しい内面的緊張、根なし草の感じ、帰属への欲求の強まり）の持ち主を、マージナル・マンと呼んだ。つまり、〈人種と文化の葛藤から、新しい社会・集団・文化が成立した同じ時と場において生じたパーソナリティ類型〉を示すものとしてマージナル・マンをとらえた。

マージナル・マンの理論は、多くの社会学者によって、さまざまに批判と修正がなされた。たとえば、E.V.ストーンキストによると〈二つ（もしくは二つ以上）の世界に挟まれて、それらの世界の不調和と調和、反発と誘引を主観的に反映する心理的不安のなかで、辛うじて身を支える人〉と定義されている。この概念は、ユダヤ人や移民にはうまく適用できるという指摘もある（G.ミュルダーら）。また、マージナル・

グループと非（ノン）マージナル・グループの間にある〈障壁〉に注目する説もある（A.グリーン）。マージナル・マンは〈所属感の不安定〉から生ずる（K.レヴィン）とか、〈地位のジレンマ〉に陥っている人、あるいは自分の社会的同一化のなんたるかに困惑し、自分が成るべく期待された役割が不確かな人（E.C.ヒューズ）と理解された。

マージナル・マンは、自己の中にある文化的・社会的境界性を生かして、生まれ育った社会の自明の理とされている世界観に対して、ある種の距離を置くことが可能である。それゆえにマージナル・マンは、人生や現実に対して創造的に働きかける契機をもっている。したがってマージナル・マンは、被差別の立場に追いやられるだけでなく、脱差別の方向を志向する場合もありうる。参考文献 H.F.ディキー・クラーク『差別社会の前衛—マージナリティ理論の研究』（今野敏彦他訳、新泉社、1973）

マージナル・マンについて今野（2015）から以上のように長く引用したが、赤鬼は人間ではないがマージナル・マンの概念にあてはめてみるのも面白いと思われる。まず、赤鬼の容姿についての表現である。「絵本にえがいてあるようなおにとは、かたち、かおつきが、たいへんにちがっていました。けれども、目は大きくて、きよろきよろしていて、あたまには、どうやら角のあとらしい、とがったものが、ついていました。」と書かれている。赤鬼は、典型的な鬼の容姿ではないところからも、人間と鬼の間のマージナルな存在と言えよう。次に青鬼と赤鬼の居住場所を見てみよう。青鬼は、赤鬼に会うために、「その日の朝に、とおいとおい山おくの岩の家からぬけだして、とちゅうの山まで、雨雲にのってきたのでありました。」と描写されているように、人里からはるか遠くに居住し、人と仲良くしたいという気持ちなど毛頭ないことがわかる。一方、赤鬼は村人が分け入ることの可能な距離にある山の崖の下に住んでいて、警戒されながらも人間と仲良くしたいと願って生活している。このように、人里の周辺に住みながら村人から疎外されている状態であったことから、赤鬼をマージナル・マンと考えることが可能であろう。

赤鬼をマージナル・マンとして物語を捉えたときに、今日の日本において文化的・心理的・社会的・人種的・宗教的な点から疎外の対象となり、日本社会の周辺に置かれやすい帰国子女、外国人労働者や、日本人と結婚した外国人妻、障害者、などに連想を広げてみると、物語の読み方も違ってこよう。自己の問題と関連付けて物語を読む視点である。

今野（2015）は、上に見たようにマージナル・マンには否定的側面と肯定的な側面があることを紹介している。否定的な側面を扱った物語として「鬼の子小綱」という「片子」をテーマにした昔話が細部を変えて全国に伝わっている。「片子」は1歳未満の子を一般には指すが、「鬼の子小綱」の話での「片子（小綱）」については、西浦（2011）が、「片子とは鬼と日本人女性の中に生まれた身体の左と右半分がそれぞれ半人半鬼の子どもであり、鬼ヶ島から親を助け日本に帰るものの、誰にも相手にされず居辛くなり、最後は自分の身体を犠牲にして鬼から親を守り、自殺する。」と、「鬼の子小綱」の1つの例を紹介している（p168）。また西浦（2011）は、河合（1994）が、全国の「片子」の話調べの結果、半人半鬼の容姿が問題になると、ほとんどが片子の死で物語が終わることを知り、強い衝撃を受けたことにも触れている。西浦（2011）

は、河合が現代の片子として幼少期に海外で育った米国からの帰国子女の存在を挙げていることを踏まえて、米国からの帰国子女が日本の学校で米国の文化に準じた行動を示すことが原因でいじめられ身体症状を呈した事例を紹介している。さらにネイティブ・アメリカンのスー族が白人に征服された後の精神的文化的荒廃の歴史を示した後に、アメリカの教育を受けさせられたスー族の少女が白人社会からはスー族の文化を否定され、スー族社会からはアメリカナイズされた行動や考えを否定され、いずれの社会からも疎外されるようになった事例を紹介している。

このような視点から、赤鬼は片子を源流としたマージナル・マンとして読むことができるのではないかと思われる。「鬼の子小綱」の話では、小綱（片子）が自分の身体を切り刻んで鬼から両親を守る話が残るが、この自己犠牲の面は、青鬼に引き継がれていると言えよう（広介がこの片子の話を知っていたか否かは定かではない）。

（2）マージナル・マンとアイデンティティ

マージナル・マンはライフ・サイクルの視点から青年期を指して使われることもある。大人の文化に順応していた子どもの時期から脱し、大人文化への不信・反発が生じ、子ども文化にも大人の文化にも所属していないその境界・周辺にいる青年をレヴィンはマージナル・マンと呼んだ。エリクソン（1959/1973）が社会的責任を一時的に免除あるいは猶予され自分のアイデンティティを迷い悩みながら探し求めている青年期をモラトリアム（猶予）の時期と捉えた概念に近いものである。

このような大人になる前の青年期にあるマージナル・マンとして赤鬼を捉えることも可能ではなかろうか。赤鬼が自分のアイデンティティを、鬼のためによりよいことをし、人間とも仲良く暮らす存在になることに求め、立て札に自分がやさしい鬼であることを書き村人を家に誘う言葉を書く。しかし、立て札を読んでも警戒する村人の言葉にむっとし、声をかけると逃げ出す人間の姿に腹を立て、立て札を引き抜き踏みつけて割るほどの怒りを見せる。赤鬼は、鬼の子どもが小石を投げつけてもにっこり笑っているやさしい姿を見せる一方、このように自分の期待と反する人間の行動に怒りを示す気の短さも露呈している。これは、善き鬼になることを理想としているが、思い通りにならない時にかんしゃくを起こし、善き鬼像が破綻をきたし、まだ求める理想の自我像が内在化されていない青年期の未熟さを示していると考えられる。

この未熟さは、鬼を警戒する人間に対して、ただ立て札を立てて仲良くしようと待っているだけで、他の働きかけを行うことに思いが及ばない点にも認められる。「君にすまない」と言いつつ、青鬼の提案によって偽りの演技を行ってしまうところにも、赤鬼の主体性が認められない。せっかく出来た人間との関係も、訪れる村人にただおいしいお菓子やお茶を供するだけの一方的なものである。宮川（2014）は、このバランスのとれない関係に当事者たちが不具合を感じないのは、差別に慣れてしまっている両者の差別意識の裏返しであるとし、普通の客に穢多の家では茶を出さないという島崎藤村の『破戒』の中の文を紹介し、村人が赤鬼の茶を飲み菓子を食うだけで相手を差別しないギブアンドテークの意思表示になることを述べている。この関係の在り方は、村人の都合よくたかる実態の描写とともに、赤鬼と人間の関係がいびつなものであることが、広介の意図するところを超えて表現されているように思える。

話の結末として、青鬼は赤鬼のためと言って姿を消し、赤鬼は友だちを失うことになる。ここで初めて赤鬼は真の孤独に直面し、自己についての内省が始まるのではな

かろうか。今までは、善き鬼とは何かを深く考えることもなく、鬼と人の両方に好かれたいだけ思い、人間が期待に答えてくれないと知るとその理由を内省することなく怒りを露わにし、人の信用を得る方法も青鬼の指示に従うだけで主体性が認められなかった。悩み試行錯誤を繰り返しながら、人と信頼関係を築くプロセスを体験することがなかったのである。偽りの演技で村人に受け入れられるが、その関係は一方的にサービスをする不均衡なものであり、村人からも招かれるような双方向的なものではなかった。

しかし、青鬼に去られた後に、赤鬼は自己の生き方に直面せざるをえないのではなかろうか。青鬼は自分にとってどういう存在であったのだろうか、演技をしてまで村人と仲良くしようとしたことはどうだったのか、これから村人とどうつきあっていけばよいか、など多くの内省が赤鬼に生じ、今の現実を直視した自分の生き方の模索が始まるのではないだろうか。

このことは、今野（2014）の示したマージナル・マンの肯定的側面である、①自己の中にある文化的・社会的境界性を生かして、生まれ育った社会の自明の理とされている世界観に対して、ある種の距離を置き、②人生や現実に対して創造的に働きかけ、被差別の立場に追いやられるだけでなく、脱差別の方向を志向することにつながる。

西浦（2011）は、アイデンティティの概念を提唱したエリクソン（1959/1973）が、アイデンティティの感覚は肯定的と否定的との両方の要素で成り立っており、一つの安定した世界ではなく、自分がその世界でそれまで肯定的・否定的と捉えてきたものを自分の全存在を賭けて再構成していく過程であるという主旨のことを述べていることを紹介し、「片子もまた鬼や人間のように『一つ』の世界を形成する志向性はあるが、半人半鬼である為に完全な鬼や人間になる事は不可能で、一つの安定した世界を構築できずに、どちらにも属せないが、逆に2つの世界に深く関わりながらも、どこにも埋没しないからこそ多くの可能性を含んでいる。」（p177）と述べている。

このような孤独を前提とした個としての他者との関係性の持ち方の観点は、孤独と対峙せず孤独に埋没しファンタジーの中で母性的なものとの融合と別離を繰り返した広介の方向性とは正反対のものである。広介も、過去と現在、現実とファンタジー、山形の郷里と東京の狭間にいる、ある意味ではマージナル・マンでなかったのではなかろうか。

自分の物語として赤鬼の今後を考えるならば、人間と鬼との2つの文化に埋没せず、自分の孤独に個として向き合う中で、今と異なる鬼と人間との関係性を模索する道もあるのではなかろうか。読者にとっての鬼と人間との関係とは、結婚生活におけるパートナーと自分との異なった文化や価値観かもしれないし、家庭と集団生活の場である職場や保育所・学校との関係であるかもしれない。また、自分の中の葛藤する二つの感情であるかもしれないし、すでに形成されている自我と未だ開発されずに眠っている自我との関係であるかもしれないなどと考えていくと、「泣いた赤おに」を自分の物語として読んでいく視点が深まっていくのではなかろうか。

（3）青鬼の物語における存在の意味

では、赤鬼から去った青鬼は、自ら決断し皆と離れて個の世界を生きる存在であろうか。青鬼は、広介がこの物語創作のヒントを得たという恵喜童子の「知恵をめぐらし、その知恵をひとに与えて喜びとする」（キンダーおはなしえほん傑作選ないたあ

かおに あとがき フレーベル館 1970) というイメージを重ね合わせた存在であろう。人間の信用を得る新たな方法を赤鬼に教えるとともに、「ひとつのことをやりとげるにはだれかが犠牲にならなければならない。」ことも伝え、赤鬼が人間に疑われぬように自分が姿を消す様子は、知恵・行動力・自己犠牲的な愛を赤鬼に示したと言えよう。父性と母性を併せ持った存在とも言える。しかし、そこには赤鬼の主体性や自己決定を育てる双方向的な関わりは認められない。一方的に提案し、一方的に赤鬼の前から去っていった。そこに青鬼の自己犠牲的な切なさが伝わるとしても、残された赤鬼の心情に想いが及ばぬ自己満足的な偽善性も感じられる。個に生き自我を確立するということは、孤独を知り集団に迎合したり埋没することではないと同時に、他者とオープンにたゆまぬ相互的なコミュニケーションを続け、お互いの成長を促す姿勢を獲得することではなかろうか。

青鬼の存在は、村人が赤鬼を排除することで集団として結束していた均衡を突き破るトリックスターとして考えることもできよう。トリックスターとは、一定の均衡を保っていた社会を引っかき回すことで、社会に新たな関係を生じさせるいたずら好きとして描かれることが多い。善と悪、破壊と生産、賢者と愚者など、全く異なる二面性を持つのが特徴であり、マージナル・マンのように社会の周辺に置かれるというより、自ら、積極的に社会の枠に従わずに周辺と中心を移動し、均衡を破る存在であると言える。ラディン（1954）がインディアン民話の研究から命名し、ユング（1921）が「トリックスター元型」として取り上げたことで知られている。

現代におけるトリックスターの例を、いたずら好きからは程遠いが紹介したい。今まで優等生で親の言うことを素直に聞いていた少年が、偏差値の高い高校に合格するが、授業についていけず不登校になる。その後、こうなったのは勉強を強いて来た母親のせいだと、家で母親に暴力を振るうようになる。家が荒れ、今まで育児は母親任せで仕事に追われていた父親も無視できず、母親と密に連携するようになり、父親から少年への関わりが始まる。少年が母親に暴力を振るう行為が、今まで父親不在が当たり前になっていた家族関係を壊し、父親の参加する新しい家族関係を生み出す役割を結果として果たしたと言える。

青鬼の場合も、村の民家に押し入り次々と物を破壊し村を混乱に陥れ赤鬼がそれを防ぐことで、赤鬼を恐れ排除していた村人の従来の意識が信用へと変化し、新たな関係をつくらせたという意味では、トリックスターの役割を演じたとも解釈できよう。現実場面で集団生活をかき乱す者は嫌われるが、トリックスターとしての視点を持つと、集団や自己の再構成に一役買っている場合もあるのではなかろうか。自分の物語として読むときに、外からの攻撃者や自分の攻撃衝動、あるいは悪と自分がどう関わるかは重要なテーマとなろう。広介は、青鬼に「だれかが、ぎせいに、身がわりに、なるのでなくちゃ、できないさ。」と語らせているが、自分の物語として読む場合には、すべての登場人物を生かし、トリックスターのように境界を無視し、よりよき再構成につながる破壊を恐れぬイメージを持つことも大切ではなかろうか。

3. 道徳教育における「泣いた赤おに」を自分の物語として読む視点

(1) 「泣いた赤おに」を扱った道徳教育の現状

「泣いた赤おに」は道徳教材としても多く用いられている。宮川（2014）は、『文部省小学校道徳の指導資料 第2集』第2学年の資料名「泣いた赤おに」の指導案の主題は「心から友を思う（友情）」とされ、「『泣いた赤おに』は、青鬼の赤鬼に対する献身が深く心を打つ物語で、『心から友達を思い、行動する』という視点からも、友達とのかかわりを考えさせるためにふさわしい資料である。」と記され、この教材を使った学習活動のねらいは「友達と互いに理解し、助け合おうとする心情を育てる」ことであることを示し、この指導案が、今でも「泣いた赤おに」を使った授業に大きな影響を与えていることに異議を述べている。

昌子（2010）によると、「道徳の時間」は一時間ごとに学習指導要領に示された内容項目の中から一つの項目を選び、その項目に関わる何らかの資料を用いて、児童に「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成する」ことを目的とした授業を行うと解説している。「泣いた赤おに」は、学習指導要領によると大分類の＜2 主として他の人とのかかわりに関すること＞の友情に関する小項目に該当する。道徳教材としての「泣いた赤おに」は、この友情について考えさせる資料として機能すればよいという考えである。そのため、一時間で一つの資料に関する授業を終えるために短時間で読み終えほぼ一読で内容が理解できるよう、オリジナルな文の本筋を残して簡略化されている。微妙なニュアンスを感じ取ったり、物語の世界に共感的に入り込むことには難があり、各教師が教材の提示の仕方を工夫しているのが実情であるという（pp 7 - 8）。

(2) 「泣いた赤おに」を取り上げる学年の上昇と視点の変化

取り上げる学年は当初は主に小学校の低学年中心であったが、中学年、高学年と学年が上がっていき、最近では中学校でも取り上げられるようになってきている。しかし学年が上がっても、「友達と互いに理解し、助け合おうとする心情を育てる」という枠からはずれず授業は少ないことに、宮川（2014）は疑問を呈しており、筆者も同感である。宮川（2014）は、はたしてこの作品は、「青鬼の赤鬼に対する献身が深く心を打つ作品」で、青鬼の赤鬼に対する「真の友情」を主題としているのだろうか、また、「友情」をテーマとした道徳の授業であっても、青鬼は本当に赤鬼の気持ちやものの考え方を理解して行動したのだろうか、さらに、青鬼の自己犠牲のおかげで赤鬼の願いは叶ったのだろうか、と疑問を呈している。そして、主人公は青鬼でなく赤鬼であり、青鬼の行動は献身的で赤鬼のためとっていたとしても、赤鬼の意を汲まぬ一方的なものであったと結論づけている。また、赤鬼と村人が仲良くなれたと言っても赤鬼が一方的にサービスするものであり、鬼全体が乱暴者であるという偏見差別からは赤鬼自身も自由になれなかったゆえに、赤鬼がその願いを叶えることの出来なかった悲しみを描いていると解釈している。そして、このような「鬼」と「人間」という差別・偏見の関係は、子どもたちの身の回りに多々あることを踏まえて、真の友情、真の融和とは何かを考える教材として扱ってこそ、この作品の主題は生かされると結んでいる。このように自分の日常生活と関連付けて自分の物語として読むことが、道徳教育でこそ必要であろう。

伊藤（2014）は、永田繁雄の「泣いた赤おに」についての発達段階の特質を踏まえた「子どもが考えたいくなるような発問」について紹介している（p59）。2年生では「共感や感動を深めるもの」、4年生では「迷いや葛藤に追い込むもの」、6年生では「客観的、批判的な見方を促すもの」が発問の主題である。具体的には、2年生では赤鬼が涙を流す場面でその感性に訴えた「赤鬼は青鬼に心の中でどんなことを言っているのだろう」などの発問、4年生では「たたけ・たたけない」といった場面をあげて、青鬼と赤鬼の関係の持ち方や赤鬼の葛藤を問う発問、6年生では「青鬼と赤鬼の間にあるものは友情と言えるだろうか」などの発問があげられる。富樫（2006）は、自らも参加した高橋秀一らとの山形における小学校2年生、4年生、中学2年生への「泣いた赤おに」の読み聞かせに対する感想の分析結果を紹介している（pp.149-154）。赤鬼が青鬼の手紙を読み涙を流す場面について、小学2年生は、「かわいそうだ」などの情緒的な感想が多く、小学4年生は青鬼のやさしさに触れた感想が見られ、中学2年生では、「赤おには本当にそれで幸せになったのか」などと問題意識を持って読んでいることを報告しており、永田の発達段階に応じた発問内容に対応した結果を示した。伊藤（2014）は和井内良樹が、「旅に出た青鬼は自分のしたことがほんとうによかったのかと考え続け赤鬼が心配になり村へ帰ると、青鬼を探すと赤鬼のはり紙がしてあった。」という物語の続編を創って児童に読ませ、赤鬼の反省や青鬼のこれでよかったのかという内省について、より焦点化した資料を用いて吟味させた実践も紹介している（p59）。

学校図書は、2・4・6年の副読本に「泣いた赤おに」を載せている。このことも同じ資料が発達段階に応じて異なった視点やテーマとして扱われるようになってきていることを意味している。道徳教育においても、無条件にその教材の内容を受け入れて終わるのではなく、発達段階に応じてその教材と距離を置いて対象化・客観化して読んでいくことを学んだり、その教材をきっかけに社会的な問題に視野を広げていたり、自己の内面への洞察に向かう方向性が大切であろう。また、認識面の深化だけでなく、自己の体験化・内面化を経て、日常の行動変化へつなげていく授業の在り方が問われるであろう。それが自分の物語として読むということであろう。そういう意味で、「泣いた赤おに」は物語構成は単純であるが、作者の意図を越えて、「友情」だけでなく多くの視点を内包しており、道徳の教材として適した作品であると言える。

4. 多くの連想を促す「泣いた赤おに」

物語は青鬼が姿を消し赤鬼が涙を流すところで終わっているが、その後、二人はどのように生きていくかということに想いをはせると、様々な物語が浮かんでこよう。「泣いた赤おに」の物語は突然の青鬼と赤鬼の別れで終わっているのも、様々なその後の物語を連想させ、読者の内的なものを投影しやすい作品と言える。それが、この作品が読み継がれる理由の一つであろう。

例えば、赤鬼は村人と別れを告げて青鬼を探す旅に出る話も考えられよう。赤鬼が旅に出るときに、青鬼と示し合わせて村人をだましたことを村人に謝罪する物語になるかもしれない。青鬼と赤鬼の芝居を村人が知ってどんな反応を示すかで物語の展開は異なったものになろう。あるいは、旅に出た青鬼は、女性の鬼と恋に落ち、結婚し

て赤鬼の住むところからはるか遠い場所に居を構え子どももできて、赤鬼とのことは青春時代の一つの淡い思い出になっていく話もできよう。上記の和井内の続編のように、自分が良かれと思ってやったことが赤鬼の気持ちを考えない一方的なものではなかったか、旅に出る前に赤鬼ともっと色々話し合うべきだったと思い、赤鬼の所へ戻る話もある。青鬼は赤鬼の自分への気持ちを確かめるために家に隠れていて、赤鬼が涙を流すのを見て青鬼も泣きながら姿を現し二人で抱き合う話はどうであろう。青鬼は、自分の手引きで赤鬼が村人と仲良くなったことを喜ぶが、人間と赤鬼が仲良くなるのを助けたことを他の鬼達に知られて制裁を受けるのを恐れて姿を隠し、姿を消す理由は赤鬼のためだと恩を着せる話も考えられる。村人は毎日泣き暮らす赤鬼を心配し、逆に食べ物を持ってきたり、家に招き、双方向の新たな交流が始まるという話もおもしろいだろう。泣き暮らす赤鬼に理由を村人が問い、真実を知り怒って、赤鬼を村人が排斥するという話も考えられよう。真実を知り、村人が青鬼と赤鬼の友情にいたく感動するとともに、自分達の鬼への偏見差別を深く恥じ、鬼全体との交流の仕方を真剣に考えるようになるという物語も夢想できる。

このように、「泣いた赤おに」のその後の物語が幾通りも考えられる。その物語展開の内容には、読者の価値観や願望、直面しているテーマなどが投影されやすい。このことを自覚し、他の物語を作った者と話し合うことで、お互いに自分について新たな視点を得ることができるようになる。また、物語のその後に想いを馳せるのは勿論であるが、物語の中で描写されていないことに想像を巡らすことでも、思いがけない自己に直面することがあり、自分の物語として読む方法は多様であろう。

5. 広介の生い立ちと「泣いた赤おに」

(1) 作品に投影される広介の生い立ち

広介は、1917（大正6）年に「黄金の稲束」の懸賞募集童話で賞を獲得して以来、自然主義小説から童話に転じた。倉田（1960）は、広介が「児童文学の書き方」で述べた「いわゆる童話文学は、小説などがこのようにある世の中をうつしてみせる意図とは違って、このようにありたい世界—願望のこころの世界を書こうとする。」という文や、「兎の画家」のあとがきで、童話は「心の世界」を描くものであり、現実にはなくとも「こうありたいと願うならおもいどおりになる世界」であり、自分で補える「便利な世界」であると述べていることを紹介している。そして、広介の作品は、弱き者への祈りであり、また何らかの弱き者から出た祈りであり、積極的な情熱ではなく、淋しさや悲しさから出発しており、空想や想像の翼がひ弱く、貧しいものになっていくと、批判的に分析している（p35）。小説においては自身の私生活を描写し、童話においてはそれが自己の願望や祈りへと転じた広介の作品には、以下に述べるように彼の内的な世界が他の作家に比べて強く現れていると思われる。

広介の娘である浜田留美（1998）は父の生涯について書いた著書の中で、「泣いた赤おに」について広介が『廣介童話名作選集』の中の著者の「添える言葉」で書いた文を以下のように紹介している（p118）。

おそらく、どんな童話においても「鬼」はとかく、不利な立場にまはされて損な役

目を負ってきました。童話における鬼そのものがさうあるところに、童話の訓意^{モラル}は生かされます。さうなれば、訓意のための鬼の役目も、空しいものではありません。然しながら、わたくしは、童話の「鬼」を、童話において、もっと進めて、生かしてみたいと考へました。これまでの鬼から、鬼を、もっと進めて、生かすといっても、鬼が、まるで、鬼ではなくなってしまうようなやり方は、やりそこなふと、をかしたなものになるのです。わたしの場合においては、さういふ仕方をとらないで、鬼を、鬼からひきあげても、鬼そのものにつきまふ運命、すなはち、急には、断ち切りがたいきづなを鬼にのこしたのです。これによつて、鬼に対する同情が、読む者の気持ちにわいて、それが鬼といふものを、われらの方へ—そう近づけさせるであらうと、わたくしは考へました。

そして彼女は、自分の感想を以下のように書いている（pp.118-119）。

この文の中に、私は、「断ち切りがたいきづな」を深く思う作者の姿を思い浮かべる。哀れな家族から、無理に心を引き裂くように一人上京して、自分の身を立てる方策ばかりに必死だった己から、ふと別な自分に帰るとき、心からの愛を残して去って逝った人や、もろもろのはらからとのきづなへのさまざまな思いが、人生の哀しみとして胸に迫ったのにちがいない。自己を生かすために、新しい世界に飛び出した者の受けずにいない罰、知らずに犠牲にした深いきづなを悔いる涙が、幼い者の心にさえ響くのである。

広介は「泣いた赤おに」を書くことによって、心のやさしい良い鬼であり人間と友だちになることができても、鬼という宿命から逃れることのできない哀しさを、青鬼という大切な存在に去られた赤鬼に象徴させて表現した。広介の娘留美は、自己を生かすために「断ち切りがたいきづな」を犠牲にして上京した哀しみを持つ父とこの作品を重ね、父を赤鬼に投影して見ていると言えよう。広介は、中学時代に両親が離婚し最愛の母と会えなくなる。父が破産し生活も困窮する中、経済的な見通しもなく早稲田大学へ入学した。叔母のさよの支援を受けながら、懸賞小説で生活費を稼ぎ、童話作家の地位を築いた経緯がある。さよは、生涯広介を支え、広介の結婚後も彼と同居を続け一生を終えた。

上記のように、広介には自分を犠牲にして彼の立身出世に尽くしたさよの存在がある。浜田留美（1998）は、「なにか、一つの、めぼしいことをやりとげるには、きっと、どこかで、痛い思いか、損をしなくちゃならないさ。だれかが、犠牲に、身がわりに、なるのでなくちゃ、できないさ。」という青鬼の言葉を、広介の妻であり留美の母であるトクが、広介の心にさよのことがあったのだと述べていることに同意している（pp.117-118）。赤鬼が広介であり、青鬼がさよであるということであろう。

広介は、「泣いた赤おに」が生まれる前年に、高野山総本山金剛峯寺の、知恵をめぐらしその知恵を人に与えて喜びとする「恵喜童子」と出会い、「この童子をかりて創作童話の中に新しい日本の鬼を生かして書いてみたかった。」と述べている（キンダーおはなし絵本傑作選ないたあかおに あとがき フレーベル館 1970）が、娘留美の解釈のように、赤鬼と青鬼には広介自身の生い立ちから来る心情が色濃く浮き出ていると言える。

広介の「断ち切りがたいきづな」との別離やさよのことがこの作品に投影されていることを示したが、それ以外に、父為助についても述べることが出来よう。為助は仕事を嫌い家庭を省みることがなかったために広介の母やすと離婚に至り、破産して村はずれの追兼橋おっかなぼしに掘っ立て小屋を建てて住んでいたことから、村人に「追兼橋の奇人」と呼ばれていたと言う（浜田留美, 1998）。村里近くの山に住み村人と親しくなることを願っていた赤鬼と重なるところがないだろうか。

このような広介の生い立ちを考えると、「泣いた赤おに」に登場する鬼には、広介自身や、広介の叔母のさよ、広介の父為助のイメージが重層的に重なって来よう。物語の登場者のイメージは、このように作者周辺の実在の人物とリンクしたり、その他の像が浮かんだり、多義的多層的である。さらにイメージを広げていくと、「泣いた赤おに」に登場する青鬼、赤鬼、村人の三者は、広介の心の中の異なる人格の投影とも解釈することが可能である。青鬼は父性的・母性的で、理性や愛情を示し、広介の中の「恵喜童子」を体現している。赤鬼は理想的で愛情もあるが、激しやすく動揺しやすく、まだ未熟な青年の部分であり、村人は状況に迎合し現実社会に適応しようとする俗的な部分と考えると面白いであろう。

（2）広介の攻撃性

さらに、広介の童話は善きものが中心に登場するが、時にはとつとするような残酷さや攻撃性が表現されていることがある。「泣いた赤おに」の描写の中でも、赤鬼は「おにの子どもが、いたずらをして、目のまえに、小石をぼんとなげつけようとも、赤おにはにっこり笑って見ていました。」というやさしい赤鬼の性格を示す表現がある。それに反して、村人を招く立て札を見ても赤鬼の意に反して村人が逃げていくのを見ると、怒りを爆発させ、立て札をへし折るような相矛盾した表現がなされている。

他の作品にも同じような優しさ・愛情と相反する残酷さ・攻撃性が見てとれる。例えば、「五ひきのやもり」では被虐的な攻撃性が表現されている。テーマは父親のやもりと母親のやもりと三匹の子どもやもりがお互いを思いやる愛情である。父やもりは住んでいる家のずれおちている羽目板を修理するためにおじいさんが板に釘を打ったときに、その板の裏にいて釘で打ちつけられてしまうことから話が始まる。父やもりは釘に固定され移動できないまま生きるが、子ども達を喜ばすために釘にさされたまま回って見せるという叙述があり、被虐的で哀愁を誘う。

「黒いきこりと白いきこり」という作品でも、黒いきこりに鉄砲でくまは頭を撃ち碎かれるなど、くま、きつね、りすは銃で撃たれ皮をはがれる描写がある。ここでも攻撃性がさらりと表現されている。それでいて、神様が皮をはがれた動物達に「けっして人間どもをうらむなよ。」と語っているところが広介らしい。赤鬼の相矛盾した態度と同じものを感じる。

このように広介の作品には、時に怒りや攻撃性が表現されることがあるが、敵と対等に戦う種類のものではなく、どちらかという和被虐的である。その根底には自分の力ではどうしようもなかった両親の離婚による母との別れに対する無力感や悲しみから来る怒りがあったのではなからうか。誰にも向けられぬ怒りが、赤鬼のように立て札に向けられたり、父親やもりのように自己が傷つけられる形の攻撃性の表現になると思われる。また、戦時中には自分も国策に迎合した作品を書かざるを得なかった事実があるが、自分のファンタジーの世界に土足で入ってきた軍国主義に向けられた怒

りや悲しみもあったのかもしれない。

広介は、現実には満たすことのできなかつた善きもののみが登場する世界を童話で描いた。短い話が多かつたが、死と生、別離と出会い、愛情と攻撃など、相反する要素が、やさしく切ないリズムミカルな文体の中に、縦糸横糸として織り込まれているので、読者の実存に迫り、心に残るのであろう。

6. さいごに

山中（2010）によると、「泣いた赤おに（おにのさうだん）」が創作された1933（昭和8）年前後は、1931（昭和6）年に満州事変が起き、1932（昭和7）年の第一次上海事変で爆薬筒を鉄条網に突っ込み自爆して突破口を開いたという工兵3名が、「肉弾三勇士」として新聞雑誌で大々的に取り上げられ、日本国内に熱狂的な軍国主義気分が湧き始めた頃である。そして、1933（昭和8）年には、日本は国際連盟を脱退し、ドイツではヒトラーのナチス政権が誕生している。東北では凶作に加えて三陸地震と大津波に襲われた年でもあった。

このように、「泣いた赤おに」が生まれた頃は、大正デモクラシーで鎮静していた狂信的な軍国主義が再び台頭し、大日本雄辯會講談社の山中峯太郎の軍事美談「敵中横断三百里」、平田晋作の「昭和遊撃隊」など、一連の軍事少年愛国小説がブームとなった（p30）。大日本雄辯會講談社の少年雑誌『少年倶楽部』は田河水泡の「のらくろ」などが人気を博し、65万部の売れ行きであったと言う。そうしたブームの中で、児童文学は大衆の児童読み物の出版に比べて微々たるもので、少数の有名作家のものを除き、新人作家の児童文学書の出版は困難であった。プロレタリアート児童文学運動も芽生えたが、左翼出版物に関しては権力側の弾圧で読者に届く前に発禁処分された（p31）。

このような状況下での「泣いた赤おに」の評価は「青鬼の自己を犠牲にした献身的な友情」に重きを置かれるのは当然であったろう。広介自身は善意を主題にした独自の物語構成を時代の流れと関係なく行っていたが、軍による統制が文学界においても強まるにつれ、1942年以降には軍の施策に呼応した作品を書くようになる。

しかし一方で、本来の広介らしい童話も書き継がれ、1944（昭和19）年に浜田広介・坪田譲治編者代表で『現代童話四十三人集』を出しており、この選集に広介は「花と母」という、亡き母へのオマージュとも言える作品を載せている。山中（2010）は、「山形の田園風景をバックに描かれた母子像は、ほのかに温かい湯気に包まれたように優しい。ある意味で広介の童話の原点かもしれない。」（p273）と、その詩を自著で紹介した後に述べている。以下に少し長いが紹介する（pp271-272）。

手甲かけて 野に出ては
麦刈るひまを 歌のふし
われに うたひし 母上よ

しらがとなりて くら髪は
老いたまへども 歌ごゑは

若くやさしや わが耳に

わたしが、書きものに疲れたからだを横たえて、夜のねむりにおちるとき、どうかすると、目のなかに、両手のひらが浮かんでくる。手のひらは、左右につづいて、うっすらと円くひらいているのである。

麦刈ごろの季節でもあったでしょうか。／むし暑い日ざしが、野づらにかがやいて、雨を呼ぶ蛙の音が、どこからか、きこえてくるというのではなかったろうか。おかあさんと並んで野路をかえるときに、のどがかわいて、わたしは、みずがほしいといったらしい。／おかあさんは、野川のなかに、かた足をしずかに入れて、葦の根もとをかきわけました。／そうして、流れのきれいなところを、ひとすくい、そっとすくってくれました。おかあさんは、そうやって、子供の口にいそいで水をあてていましたが、指のまたから水は、あらましこぼれました。

けれども、子供は、のどをうるおすことができました。

いまでも、目さきにあらわれる両手のひらは、その手のひらでありました。
おかあさん。

目に見えない額ぶちのなかにかかって、あなたのお手は、時々、とうといかたちを見せてくださる。／その手のなかの玉のしずくは、つきることなく、わたしの心をかききやしてくださる。／もはや、あなたは、世にはおいでになられません。／もう、あなたには、あわれません。けれども、あなたは、いつも間近にいらっしゃる。いやいや、いつも、わたしの心のなかにいらっしゃる。お空にかかって落ちない日のように、時間を超えて、とこしえに、無限のなかにいらっしゃる。

この詩からもわかるように、広介の作品の根底には亡き母への回帰・融合の願望と別離への寂寥があるように思う。「泣いた赤おに」においても、赤鬼がひとつの世界への一体を願うが、青鬼との別れが生じ、さらに深い孤独感の世界へ陥る話にもとれる。今日の個とアイデンティティという視点からこの物語を読むと、青鬼との別れから赤鬼が真の孤独を体験することが、新たなアイデンティティ獲得の話へつながる必然性であるとも解釈できよう。

引用文献

- C.G.ユング, K.ケレーニ P.ラディン (1954,1956) 河合隼雄・皆河宗一・高橋英夫訳 (1974) トリックスター 晶文社.
C.G.ユング (1921) 林道義訳 (1999) 元型論 紀伊国屋書店 pp211-234.
E.H.エリクソン (1959) 小此木啓吾訳 (1973) 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房.
浜田廣介 (2004) 「泣いた赤おに」泣いた赤おに 小学館 pp.116-133.
浜田廣介 (2004) 「黒いきこりと白いきこり」泣いた赤おに 小学館p.33.
浜田廣介 (1975) 五ひきのやもり 浜田廣介全集3 集英社 pp.194-203.
浜田留美 (1998) [ひろすけ童話]をつくった浜田広介—父 浜田廣介の生涯—ゆまに書房.

- 樋口隆（2014） 作者研究「泣いた赤おに」 道徳教育, 675, 54-56.
- 石森延男（1971） 小学新国語学習指導書2 光村図書 pp.180-191.
- 伊藤啓一（2014） 研究資料・資料分析「泣いた赤おに」 道徳教育, 675, 57-59.
- 河合隼雄（1994） 片側人間の悲劇 河合隼雄著作集第8巻・日本人の心 岩波書店 pp.300-319.
- 今野敏彦（2015） マージナル・マン 部落問題・人権事典 <http://blhrri.org/jiten/image/qrcode.png> 2015年12月28日参照.
- 倉田雅子（1960） 広助童話の研究 日本文學15, 31-45.
- 教育出版株式会社編集局編（2011） ひろがることば：小学校国語：教師用指導書 2下 解説・展開編 教育出版 pp.180-186.
- 宮川久美（2014） 小学校国語・道徳教材「泣いた赤おに」の主題についての再検討 奈良佐保短期大学研究紀要, 22, 1-13.
- 文部省（1965）「小学校道徳の指導資料 第2集.
- 文部科学省 新学習指導要領・生きる力>先生応援ページ（指導資料・学習評価等）>言語活動の充実に関する指導事例集>言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】>第3章 言語活動の充実に関する指導と事例>道徳, 「道徳-3（第3学年）話し合い活動を通して、一人一人の児童に自分の思いを表現させる事例」 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/IcsFiles/afieldfile/2011/01/12/1300872_3.p 2015年11月26日参照.
- 西浦, 太郎（2011）「片子」に関する試論:河合隼雄「片側人間の悲劇」と片子の「子ども性」を手掛かりに 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 167-180.
- 昌子佳広（2010） 浜田廣介「泣いた赤おに」をめぐる一考察：童話と国語教育・文学教育、道徳教育, 茨城大学教育学部紀要, 教育科学 (59), 1-19.
- 富樫徹（2006） 浜田広介の世界—その魅力 東北清流舎.
- 山中恒（2010） 戦時児童文学論 大月書店.

